

## 自らかかわり，ともに学ぶ英語学習

---

---

### 1 これまでの研究の経緯

本校では、早期英語教育への社会的な要請の高まりや、英語教育に対する子どもと保護者の思いを鑑み、平成14年度より英語活動を開始した。そして、「子どもの将来において、必要とされる英語の力とはどのような力なのか」「そのような力を、小学校の限られた時間の中で育むにはどのような内容や方法が有効であるのか」といった小学校における英語教育の可能性を理論的、実践的に検討してきた。

前者については、英語活動のテーマを「英語によるコミュニケーションの基礎に培う」と設定し、研究を進めてきた。「英語によるコミュニケーションの基礎」とは、英語に対する好意的・肯定的な態度である。それは、「楽しい」「おもしろい」と感じる情意面のみを意味するのではなく、技能や知識・理解を伴った有用感や成就感を味わうことで形成される態度である。このような態度こそ、子どもが将来に渡って英語によるコミュニケーションの力を伸ばしていく上での基礎になると考えている。

後者については、平成15年度より、それまでの「英語活動」を全学年週一時間の「英語学習」として位置づけ、発達段階に即した内容を考えながら実践を開発してきた。実践を開発する際には、「必然性のある input」「無理のない output」「リアルなコミュニケーション」の三点を主な方略としてきた。

「必然性のある input」とは、発話したいという内なる欲求を高めるために、切実感のある場を設定することで行われるものである。例えば、「楽しくゲームをする」ためには、ALT が話すゲームのルールやそこで用いられる言葉を聞いて、その内容を理解しなければならない。そのために、子どもは、ALT の話す英語を自分の知っている英語の知識と関連づけて理解しようとするだろう。このような聞く必然性のある場を設定することで、理解できる input の量が増え、無理のない output へとつながっていくと考える。

「無理のない output」とは、十分な input を与えた後に子どもの output を促すということである。このことは、子どもの発話に対する心理的なハードルを低くすることや英語学習に対する抵抗感を弱めることをねらっている。子どもの学習の段階にあわせて、1人、ペア、小グループ、ポスターセッション形式など、適切なコミュニケーション場面を使い分けることで、心理的負担の軽減につながると考える。

「リアルなコミュニケーション」とは、自分の言葉でありのままを表現することである。例えば、ALT に「How are you?」と挨拶された時に、全員が「I'm fine.」と答える必要はないと考える。なぜなら、子どもの必要感のない定型化されたフレーズを機械的に繰り返しても、生きた知識として子どもに身につくことはないからである。従って、子どもが話したいことや聞きたいことをありのままに情報交換できる状

況設定が必要になってくるのである。

これらの三点に留意し、実践を開発してきた。このようにして開発した実践を整理し、昨年度に計画カリキュラムとして提案したものが表1である。これらの実践を通して、楽しみながら既有知識と新たな英語の知識とを結びつけ、自分の中の英語の世界を広げていく子どもの姿が見えてきた。その一方で、カリキュラムにおける学年間の目標や学習内容の系統性をもたせること、「聞く・話す・読む・書く」ことのカリキュラムにおける位置づけを考慮すること、毎時間の子どもの意識のつながりをさらに学習過程に反映させ、単元としてまとまりのある学習に仕立てていく必要があることなどの課題も表出してきた。

そこで、今年度は、「自らかかわり、ともに学ぶ英語学習」とテーマを設定し、本校がこれまでつくってきたカリキュラムを再構成する視点や単元構想の視点について提案したいと考える。

## 2 「自らかかわり、ともに学ぶ」とは

「自らかかわり」とは、英語に対する好意的、肯定的な態度であり、本校における「英語によるコミュニケーションの基礎」を具体化した姿である。ここで言う好意的な態度とは、英語に興味をもち、積極的に取り組もうとする姿勢である。また、肯定的な態度とは、英語により表現されたものがわかる（できる）という経験を重ねる中で、その子の内なる世界を広げていくことを楽しむ態度である。つまり、「おもしろい」「楽しい」という情意面だけではなく、技能や知識・理解を伴った有用感や成就感を味わうことで形成される態度こそ、子どもが将来に渡って英語によるコミュニケーションの力を伸ばしていく上での基礎になると考えているのである。

「ともに学ぶ」とは、教師と子ども、子ども同士などで交わされる必然的なコミュニケーションを通して、英語に対する情意面や認知面、技能面を高めていくということである。本校では、全学年週一時間ず

表1 本校英語学習の計画カリキュラム

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
一学期	初めての出会い 遠足のお話をしよう(動物) 色と形で遊ぼう お絵かきをしよう	アメリカのゲーム 誕生日のグラフを作ろう あいさつ  Brown Bear	自己紹介をしよう  Number and time	自己紹介をしよう② 3択クイズをつくる 自分の誕生日が言えるようになる	Let's make my English dictionary  英会話ビデオを作成しよう	Making a friend data bank  英語で学習しよう  Let's make my English dictionary
二学期	ミュージカルのお話をしよう ハロウィン 買い物をする(食べ物) クリスマス会をしよう	イングリッシュミュージカル ハロウィンパーティーをしよう イングリッシュコンサート クリスマス会をしよう②	名探偵 ABC  What's this?	My town  料理のレシピをつくる  Let's introduce a TV Program	ことわざカルタをつくる  ひとこと英語スキットをつくる  クリスマスカードをつくる	英語スピーチをしよう  オリエンテーリングをしよう  クリスマスカードをつくる
三学期	お正月の遊びをしよう いろいろな乗り物  1年間のまとめ	お正月の遊びを紹介しよう Let's go treasure hunting  1年間のまとめ	Challenge the activities! Readers Theater  1年間のまとめ	家族紹介をしよう  1年間のまとめ	パーソナルクイズをつくる  1年間のまとめ	おすすめツアーをつくる  1年間のまとめ

つ英語学習の時間を位置づけている。このように限られた時間では、いかに子どもに十分な input を与えようとしても限りがある。そこで、重要になってくるのが、input の質を高めることである。そのためには、学習のために時には苦痛を感じながら英語にふれる立場から、自分が知りたい情報を得るために英語を理解しようとする英語使用者の立場へと、子どもの立場を変える必要がある。そして、小学校においては、教師と子ども、子ども同士などで交わされるコミュニケーションに必然性をもたせることで、子どもが英語使用者となって必然性のある input を取り入れることが可能になると考えた。

本校では、特に高学年において、活動の出口のはっきりしたタスクを用いた実践を行っている。タスクとは、「実際に何かをする」活動のことであり、タスクをすること自体が目的である。例えば、6年生単元「校内オリエンテーリングをしよう」では、オリエンテーリングを楽しむために学習の見通しを教師と子どもで共有し、問題のやり取りに必要なフレーズや言葉を学習した後、校内オリエンテーリングを行った。子どもたちは、常にオリエンテーリングを行うという意識をもちつづけていたため、ALT の話す新しいフレーズや言葉を非常に意欲的に聴いていた。また、オリエンテーリングの際も、問題に正しく答えるため、ALT の説明を注意深く聴いていたのである。

本校英語学習部では、「自らかかわり、ともに学ぶ」姿を以上のように捉える。次に、このような姿を育むため、カリキュラムをどのように再構成していくかということについて提案したい。

### 3 「自らかかわり、ともに学ぶ英語学習」のカリキュラム構想の視点

以上にあるような子どもの姿をめざして、本校英語学習部では実践を積み重ねてきた。そうしてできたカリキュラムは、ボトムアップ的な足跡カリキュラムとも言えるものである。このカリキュラムを再構成するために、実践を通して明らかになった課題は、6年間の系統性についてのことである。言い換えると、小学校英語教育の目標や学習内容、活動形態の系統性をどうするのかということである。これらを明らかにすることは、教師が「いつ」「何を」「どのように」教えるのかということをもつことにつながる。さらに、小中連携に向けての小学校英語教育の到達目標を明確にすることにもつながる。そこで、以下において、目標と学習内容、活動内容について詳しく説明していく。

#### (1) 目標と学習内容

表2は、今年度作成した本校英語学習の目標である。

低学年は、英語に広くふれる段階と位置づけた。この時期の子どもは、「言葉の繰り返しをいやがらない」「ALT の発話や歌をリズムに合わせてそっくりそのままねることを楽しむ」といった特徴がある。その反面、集中できる時間が短いため、いろいろな活動を準備しておく必要がある。そこで、一時間を細かく区切り、歌やゲーム、TPR(Total Physical Response)などの活動を用いて、様々な語彙やフレーズにふれられるようにする。また、本校では、情報教育カリキュラムの中でローマ字を2年生で学習することから、2年生より文字を導入することにした。

表2 本校英語学習の目標

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
communication	sing say	answer ask	tell talk
活動→学習	多くの語彙やフレーズにふれる英語活動 → コミュニケーションを通して身近な英語を身につける英語学習		
関心 意欲 態 度	・ALT の話す英語を聞いて、まねしたりくり返したりして、英語のリズムや音声に親しむ。	・ALT や友だち、と質問に答えたり質問したりしながら、英語によるコミュニケーションを積極的にとろうとする。	・文字やジェスチャーなど、様々な手段を活用しながら、積極的に英語によるコミュニケーションをとろうとする。
聞 く 話 す	・ALT の話を聞いてまねたり、簡単な歌を歌ったりすることができる。	・ALT の話を知っている英語から推理して聞き取ったり、生活にかかわる身近な質問に学習した英語を使って答えたりすることができる。	・身近なことや自分のことを、お互いに聞いたり話したりスピーチしたりすることができる。
読 む	・アルファベットの大きい文字を読むことができる	・簡単な文を、知っている単語やALT の発話を手がかりに読むことができる。	・フォニックスをもとに、簡単な単語や文を読むことができる。
書 く		・アルファベットの大きい文字、小文字を使い、学習した身近な単語や簡単な文を書き写すことができる。	・学習した簡単な単語や文を、スキットやスピーチなど目的に合わせて書くことができる。

中学年は、英語活動から英語学習への過渡期の段階と位置づけた。この時期の子どもは、推理するような知的な活動に興味をもつようになり、グループで互いに協力するような活動を好むようになってくる。一方で、ALT の発音をそのまま真似することが次第に難しくなってくる段階でもある。そこで、答えたり質問したりする（answer / ask）程度の教師と子ども、あるいは子ども同士のコミュニケーションの場面を設定することで、実際に基本表現を用いながら身につけられるようにする。また、フォニックス（音声をベースにして、英語の文字や単語、文を読んだり書いたりすることができるようになるための指導法。アルファベットの26文字が表わす「音」を教えることにより、足し算の原理で音や文字を足していくというもの。）や文字を導入することで、日本語とは異なる英語の発音に気づく手がかりとなるようにする。

高学年は、技能や知識・理解を伴った有用感や達成感に支えられた英語に対する好意的・肯定的な態度を育む段階と位置づけた。この時期の子どもは、身の回りにある文字に興味を示す。また、知的で複雑なことを考えることを好むようになってくる。その反面、単なる言葉の繰り返しや歌に抵抗感が出始める段階でもある。そこで、例えば家族の写真を示しながら家族について説明するといった「show & tell」を行ったり実際に課題を解決していくタスクを用いたりすることで、コミュニケーションの中で基本表現を身につけられるようにする。その際には、表現のための方法の一つとして文字を活用させるようにする。

以上のように目標を設定すると、各学年における学習内容の配列が決まってくる。本校においては、学習内容の大まかな配列を次のように考えている。

低学年においては、できるだけ多くの語彙にふれることをめざす。例えば、数・曜日・色・体の部分・天気・色・形、簡単な動詞など、生活にかかわる身近な言葉である。また、「what」「when」などの疑問詞を用いたフレーズやあいさつなどについても、活動を通して慣れていくようにする。

中学年以降は、低学年でふれられなかった語彙やフレーズにふれることをめざす。例えば、教科や時刻、

位置、職業、形容詞や be 動詞など抽象的な概念も含んでいる。そして、これらを「聞く」「話す」「読む」「書く」活動を通して英語がわかる喜びを見出せるようにするのである。具体的には、各単元における基本表現を明確に定め、単元の活動の中で基本表現を聞いたり話したり書いたりすることで、基本表現を身につけさせるのである。

このような学習内容の配列を行うために、本校英語学習部では、これまでの計画カリキュラムの中で出てくる語彙と基本表現をすべて分析し、「学年に応じたものになっているか」「他に必要な語彙と基本表現はないか」を検討している。このような過程を経て、カリキュラム評価、改善を行うことで、6年間の英語学習の積み重ねを可能にするカリキュラムを再構成していくことが可能になると考える。

## (2) 活動内容

このような形で目標や学習内容を設定するが、小学校英語を中学校英語の前倒しにするつもりはない。「英語によるコミュニケーションの基礎に培う」ためには、小学校英語らしい活動を通して学習を進めることが大切になってくると考える。その際には、選択した活動がどのような意義をもっているのかに注目する必要があるだろう。表3は、松川禮子氏が示した英語にかかわる分類をもとに、本校に合わせた形で活動の種類、内容、意義を整理したものである。

表3 本校英語学習にかかわる活動の分類

活動の種類	活動の内容	活動の意義
①英語の音、リズム等に親しむ活動	歌、チャンツ、TPR、フォニックス	語彙やフレーズに慣れる ↓ 実際に使ってみる  ↓ 考えて新しいものをつくる
②英語の単語や表現に習熟する活動	ゲーム(タッチゲーム、カルタ、バスケット、ビンゴなど)	
③英語の機能・英語使用場面に重点をおいた活動	買い物ごっこ、レストラン、道案内、電話	
④英語で体験する活動	スポーツ、教科の学習、オリエンテーリング	
⑤創作・自己表現活動	スキットづくり、劇づくり、Show & Tell、カード作り、ビデオ制作	

ここでは、活動の意義を「語彙やフレーズに慣れる」「実際に使ってみる」「考えて新しいものをつくる」の三つに分けて活動の内容を整理している。単元の進み具合によって、あるいは子どもの発達段階によって活動の意義を考慮しながら、活動内容を構成する必要がある。そのことで、中学校英語の前倒しにならず、教師が「教えること」を明確にした英語学習をつくることを可能にすると考えられる。

(高山宗寛・R.I.Steinsiek)

## 《参考文献》

兵庫教育大学附属小学校(2002~2005)「提案要項・学習指導案集」

松川禮子(2004)「明日の小学校英語教育を拓く」、アプリコット

樋口忠彦(2005)「これからの小学校英語教育」、研究社

村野井仁(2006)「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」、大修館書店